摂南大学教育学研究
No.17

実践報告

生徒指導のベースはコミュニケーション

森　　均*

Communication is the Basis of Student Guidance

Hitoshi MORI

【要　約】
本稿では、文部科学省の「生徒指導提要」（2010年）示されている生徒指導の意義を踏まえて、生徒指導の最終目標は自己指導能力の育成であることと述べ、生徒と校長とコミュニケーションを「ちょこっとコミュニケーション」と名付け様々な会話を紹介している。特に、遅刻防止指導、自転車の安全運転指導については詳しく紹介している。また、大阪府では「教職員の評価・育成システム」が導入されており、校長は教員の授業を見て教員個々の評価の参考にしなければならないが、校長が教室内に入った際の生徒たちの反応をユーモラスに紹介している。そして、社会からは見えにくい学校の生活指導上の課題の存在を指摘し、教職課程履修学生に対して自らの高校時代の振り返りつつ、教職への思いを再確認するように促している。

*大阪女学院大・短大教員養成センター

Ⅰ　目的

生徒指導については、文部科学省の「生徒指導提要」（2010 年）の第 1 章第 1 節に次のように示されている。

1　生徒指導の意義

「生徒指導は学校の教育目標を達成するうえで重要な機能を果たすものであり、学習指導と並んで学校教育において重要な意義を持つ。」

2　生徒指導の積極的な意義

「各学校においては、生徒指導が、教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための自己指導能力の育成を目指すという生徒指導の積極的な意義を踏まえ、学校の教育活動全体を通じ、その一層の充実を図っていくことが必要である。」

3　生徒指導の目標

自己指導能力の育成が生徒指導の最終目標である。自己指導能力については次のように示されている。

「自己指導能力をはぐくんでいくのは、学習指導の場を含む、学校生活のあらゆる場や機会である。授業や休み時間、放課後、部活動や地域における体験活動の場においても、生徒指導を行うことが必要である。その際、問題行動など目前の問題に対応するだけにとどめることがないようにする必要がある。発達の段階に応じた自己指導能力の育成を図るには、各学校段階や各学年段階、また年齢と共に形成されてくる精神性や社会性の程度を考慮し、どの児童生徒にも一定水準の共通した能力が形成されるような計画的な生徒指導が求められる。」（下線は、筆者による。）

これらのことを踏まえて生徒の成長を促すには生徒とのコミュケーションがきわめて大切であると考える。

そこで、筆者が、校長を務めた大阪府立普通科高等学校（全日制の課程単独校　1 学年 7 学級）において生徒と交わした会話等を紹介したい。

Ⅱ　事例

筆者は、生徒たちとの些細な接点を見逃さずにコミュニケーションを図ることを「ちょこっとコミュニケーション」と名付けている。その実例を紹介したい。

1　生徒との「ちょこっとコミュニケーション」

(1)　朝 8 時 20 分：　女子生徒Ａがいつもどおり自転車で登校。駐輪場で自転車をゆっくり置いている。

校長「今日はスッピンか。」

Ａ「うん。」

校長「・・・。」

Ａ「しんどかってん。」

校長「そうか。でもよう来た。」

Ａ「うん。」

校長「十分、間に合ったな。」

Ａ「うん。」

校長「ボチボチやりや。」

A「うん。」

(2)　玄関前：　朝、40 分遅れてきた女子生徒B

校長「どうしたん？」

B「(通学用)定期（券）忘れて・・・。」

校長「家に戻ったんだ。」

B「はい。」

校長「どこで気づいた？」

B「駅。」

校長「そう。そりゃー大変だった。」

B「朝からクタクタ。」

校長「でもがんばって来たやん。」

B「うん。」

(3)　体育館入り口前：　1 時間以上遅れてきた男子生徒C

校長「今日はゆっくりやな。」

C「うん。」

校長「社長出勤やな。」

C「まぁー」

校長「今のうちやな。」

C「うん、今のうちや。」

(4)　玄関前：　1 時間 30 分以上遅刻してきた男子生徒D

校長「今日は、エライゆっくりやな。」

D「いろいろあんねん。」

校長「そやな、いろいろあるわな。」

D「うん。」

校長「もうちょっとハヨこなー。」

D「うん。」

(5)　通用門：　いつも自転車通学の女子生徒Eが歩いてきた。

校長「今日は、歩きか？」

E「自転車盗られた。」

校長「どこで？」

E「駅で。」

校長「お疲れさま。」

E「・・・。」

後日、下校時の玄関前で同じ女子生徒に

校長「今日も歩きか？」

E「自転車。」

校長「みつかった？」

E「うん。1 時間以上歩いて取りに行ったの。」

校長「ほー。」

Ｅ「へトへトよ。」
校長「お疲れー。」
Ｅ「校長こそ、お疲れー。」
校長「ありがと。」

(6)　２階廊下で女子生徒Ｆと出くわし話す。

校長「この前、あそこのコンビニ過ぎたところで、２列で走っている自転車を（自転車で）猛スピードで追い越したやろ？」
Ｆ「はい。」
校長「こんなにふくらんで。」(右手でそのときの様子を表す)
Ｆ「うっふふっ。」（笑い）
校長「あんたの後ろの自動車は急ブレーキを２回も踏んどったぞ。」
Ｆ（笑い）
校長「慎重に(自転車を)運転せんかいな。」
Ｆ（笑い）
校長「事故したらどうすんの？」
Ｆ「はーい。」

(7)　１学期中間考査の初日：　「テスト人生はこれからも。」

今日は、1 学期中間考査の初日である。朝、いつものように正門に立って生徒を迎える。8 時 40 分になって男子生徒Ｇが自転車で登校してきた。

校長「おいおい、急いだ方がいいぞっ！」
Ｇ「(テストは）２時間目からです。」
校長「そうか。余裕やな。」
Ｇ「家では、集中できなくて。」
校長「そうか。」
Ｇ「テスト人生もこの１年で終わりです。」
校長「えっー？これからだぞー！！」
Ｇ「？！」
校長「俺なんか、今までどれだけ試験を受けてきたか・・・。」
Ｇ「？・・・。」
校長「深く考えなくていいから。今は、直面していることを真剣にやればいいから。」
Ｇ「はーい！」

(8)　卒業アルバムの撮影日

今日は、卒業アルバムの撮影日である。３年生の女子生徒達は気合いが入っている。校長室の前の廊下で撮影の順番を待ちながら鏡とにらめっこ。皆、顔の手入れに余念がない。

校長「完璧やな。」と声をかける。
女子生徒Ｈ「そう。（将来の）旦那に見せるねん。」と鏡を見たまま答える。
校長「おっ！そうか。」
女子生徒Ｈ「校長先生ぐらいの歳になったら（私、アルバムを）見るねん。」
校長「ふーん。でもそれまで、生きないとな。」

H「大丈夫。（校長は）もうすぐ、70 歳だろう？」
校長「なにっー。」
H「（校長は）もうすぐヨボヨボのおじいになる。」
校長「なんだと。」
H「ごめん、ごめん。もうすぐ 60 歳。」
校長「ああ。将来、町で（私を）見かけるだろう。」
（Hは私と同じ町に住んでいる）
H「うん。」
校長「そのときは『いつまでもお若いですね。』と言うんだぞ。」
H「わかった、わかった。そう言うから。」
校長「それが礼儀だぞ。」
H「わかった、わかった。わかったって。」と言って逃げて行った。

2　自転車の安全運転指導

自転車で通学する生徒が多い高校では、安全運転の指導が課題になっていることが多い。近隣住民からのクレームも多く、苦労が絶えない。ここでは、実際の指導シーンを紹介したい。

なお、ここからもアルファベットを用いて新たにAから順に生徒を表記するが、前節までの生徒とは別人である。

(1)　自転車の二人乗り・・・そして

出張を終えて急いで学校に戻ると、ちょうど生徒たちの下校の時間帯であった。もうすぐ学校と言うところで、本校の女子生徒が自転車に二人乗りして近づいてきた。歩道の中央で仁王立ちになる。自転車の前輪が私の股ぐらに入って止まった。

校長「私を誰だと思う？」
女子生徒A「校長先生っ！」
校長「自転車の二人乗りは立派な交通違反です。やったらあかんやん！」
女子生徒B「すいません。」
校長「事故してみ。傷だらけになるでー。」
B「はーい。」

しばらく歩くと、また女子生徒の二人乗りがきた。進路を遮る。

女子生徒C「あっ！校長先生や！」
校長「こらっー、あかんやろ。」
女子生徒D「はい。」
校長「事故してみ。骨折するかもしれないぞ」と言って女子生徒Dが背負っている鞄をポーンと叩いた。

○正門に近づくとまだ多数の生徒が下校中であった。今度は男子生徒が女子生徒を後ろに乗せている。

校長「二人乗りしたらあかんやろ！」
男子生徒E「どこのおっちゃん？」
校長「『校長』です。」

女子生徒Ｆ「あっ！（体育祭の）応援団が朝６時に河川敷で集まっていることをばらした人や。」

校長「！・・・そのことか。とにかく降りろや。」

Ｆ「はーい。」

校長「（事故に遭って）怪我したら痛いぞー！」

Ｆ「はーい。」

校長「二人乗りは道路交通法違反です！」

Ｅ「うん。」

(2)　乗るな、乗せるな、自転車二人乗り

今朝、正門に立てなかったので、下校時に立っていると、多数の生徒が下校する中、いきなり男子生徒が自転車に２人乗りして現れた。私は、後ろに乗っている男子生徒Ｇに飛びついて無理やりおろした。

校長「おい。あっち行こう。あっちの看板のとこ行こう。」

と言って、その生徒の肩に腕を回し美術部員が製作してくれたばかりの看板の前に向かう。看板は通用門の横にある。

男子生徒Ｈ（Ｇに向かって）「新しい友達ができたのー？」とＧをちゃかす。

看板の前について、

校長「（看板）読んでみ。」

Ｇ「乗るな、乗せるな、自転車二人乗り。」

校長「もう一回読んでみ。」

Ｇ「乗るな、乗せるな、自転車二人乗り」

校長「だろう。ケガしてからなら遅いからナ。」

Ｇ「うん。」

校長「気をつけて帰るんだぞ。」

Ｇ「うん。」

Ｈ「校長先生！さいならー。」

校長「おっー！気をつけてナ、さよならー。」

正門に戻ると、女子生徒Ｉが、自転車に乗った男子生徒Ｊを止めるやいなやＪの自転車の荷台を左手でしっかり掴み、

Ｉ「私、前に乗るから。あんた後ろに乗りっ！」

Ｊ「・・・。」(迷惑そうである)

校長「オレは見たぞ！」

Ｉ「きゃー！校長先生やっー！！」（ＩはＪの自転車から手を離す）

校長「オレは見たぞ！」

Ｊはその間に自転車を進め正門を出た。

ＩはＪを追いかるように走って逃げながら「待ってー！」と叫んだ。

校長「ケガするなよー！」

(3)　「普通のおっちゃんや。」と思った。

午後３時 30 分。今日が教育委員会事務局への提出締め切りの書類を持って慌てて学校を出る。生徒たちも下校している。

学校近くの交差点につくと後ろから２人乗りの自転車が近づいてきた。
校長「こーらー。『２人乗りはあかん』といつも言っているだろうー！」
　　と言って自転車を止める。
女子生徒Ｋ「あっ！校長先生や。」後ろの女子生徒Ｌは荷台からゆっくりと降りた。
校長「足が傷だらけになっちゅうぞ！」
Ｋ「『普通のおっちゃんや』と思った。」
校長「皆からそう言われる。」
Ｋ「この子、足の調子が悪いから（後ろに）乗せたの。」
校長「うん！？」
Ｌ「バイト間に合わない！」
校長「バイト、どこ？」
Ｌ「○○○○。」
校長「この辺にはないな。」
ドテッ！と音がする。自転車に乗ったおばさんが後ろから私の鞄にぶつかったのである。
おばさん「すいません！」
校長「いえいえ。」
　おばさんが去ってから
校長「ほら、じっと立っていてもぶつけられるんや。」
Ｋ、Ｊ「・・・」
Ｊ「先生、保健室で会った！」
校長「！？・・・ああ、あのときの。」
Ｊ「そう。」
Ｋ「校長先生、さよなら。」
校長「う、うん」（ここで引き下がっては、私の視界から消えた瞬間、また２人乗りを始めると思った。）
Ｋ、Ｊ「！？」
校長「（２人と）一緒に帰る。」
Ｋ、Ｊ「えっ！？」
Ｋ「！・・・。それじゃ私、帰るわ。」自転車のＫはさっさと「さよなら。」と言って市民病院の方向に走り去った。
　駅に向かってゆっくり歩きながらＪと話す。
　引っ越してきたこと、家族のこと等いろいろ聞きながら駅の改札口についた。
校長「定期？」
Ｊ「切符。」
校長「先に行くよ。教育委員会に行かないといけないから。」
Ｊ「はい。さよなら。」
校長「うん。気をつけて。」

３　授業見学

大阪府立高校では校長は全教員の授業を見なければならない。授業を見るために教室に入ると生徒たちはさまざまな反応を示す。その一部を紹介したい。なお、ここからも前述同様、生徒Ａらは別人である。

＜事例１＞　教室に入っていくと
女子生徒Ａ「あれー？」
女子生徒Ｂ「校長先生来た。」
女子生徒Ｃ「ここ（前の席が）空いてるから（座ってください)。」
校長「(前の席の生徒は）どうしたの？」
Ｃ「お休み。」
校長「自分（Ｃさん）が前の席に移り、私が最後尾の（あんたの）席に座るから。」
Ｃ「ダメ。」
校長「どうして？」
Ｃ「顔、つくるの。」(化粧するの)
校長「！？・・・そうなんや。」と言ってＣさんの前の席に座る。
授業が終わって後ろを見た。
校長「(化粧は）完璧やな。」
Ｃ「うん。」
校長「ノートは？」
Ｃ「ちゃんととったよ。ほら。」
校長「おっ、ほんまや。」
＜事例２＞教室に入っていくと
女子生徒Ｄ「何しにきたの？」
校長「みんながまじめに勉強をしているか見に来た。」
Ｄ「そうなんや。」
校長「先生も『まじめに教えてるか。』もね。」
Ｅ「〇〇先生の授業も見てよ。」
校長「その先生なら３日前に見たよ。」
Ｅ「私が質問しても答えてくれないんだから。」
校長「それはあかんな。」
Ｅ「言うといて。」
校長「わかった。言うとくから。」
Ｅ「ほんまに腹が立つ。」
校長「わかった、わかった。」
＜事例３＞　体育の授業を見ようと体育館に行くと、女子生徒達が集まってきた。すぐにバスケットボールの授業が始まる。
教員「今日は、校長先生が見に来ておられまーす。」
女子生徒Ｆ「校長、体操服着てない・・・。」
準備運動の後、今日の授業の説明が終わった。

女子生徒Ｇ「校長先生も一緒にやろう。」
校長「えっ！？左足首をねん挫していて痛いねん・・・。」
Ｆ「一人、足らないし・・・。」
Ｇ「校長先生。やろう、やろう。」
校長「・・・まっ、いいか。」
６人のチームが４組そろった。総当たり戦が始まり、３試合に参加した。
＜事例４＞　体育館に行くと
女子生徒Ｈ「私の名前覚えている？」
校長「えっ！？・・・、Ｘさん。」
Ｈ「違う。Ｈ。」
女子生徒Ｉ「私の名前は？」
校長「うーん、Ｙさん。」
Ｉ「違う。Ｉ。」
校長「今日は、皆、（体育の授業で）髪の毛を束ねているからわからないわ。」
　授業が終わってから、私の前で２人とも髪を束ねているゴムをはずし
Ｈ「私、Ｈ。」
Ｉ「私、Ｉ。」
校長「わかった。」
　翌朝、正門に立って登校してくる生徒達に挨拶をしていると、私の前で自分自身の顔を指さす女子生徒がいた。
校長（慌てて）「Ｉさん！」
Ｉさんはうなずき、満足気に校舎に向かって行った。

４　「今朝も、来てますね。」

だんだんと寒さが厳しくなり、朝、起きにくくなってきた頃である。いつもより遅く７時 15 分に学校につくと、２階のある教室の電灯がついていた。校長室に鞄を置き、そっと２階にあがりその教室をのぞくと、一人の女子生徒Ｊが教室を掃除していた。次の日も、次の日も・・・。

○　朝、駅から学校に向かうと４階建ての校舎が見えてくるが、その教室だけ電灯がついている。

門扉開閉要員の方との朝の挨拶は、「おはようございます。」から「今朝も、きてますね。」に変わった。

たまに、電灯がついていない朝は「どうしたんでしょうね。」と２人で心配してしまう。

○　ある日の朝、その教室に向かい、掃除中のＪさんに声をかけた。

校長「おはようございます。」
Ｊ「おはようございます。」
校長「毎日、掃除？」
Ｊ「はい。」
校長「そうか・・・。」
Ｊ「気にしないでください。」

校長「？！・・・。」

Ｊ「好きでやっていますので。」

校長「そうか。」

○　ある日、午後３時 40 分頃。出張先から学校に向かうと、生徒たちが次々自転車に乗って正門から出てくる。

校長「待てよ。あの姿は・・・。」

その中にＪさんがいた。その自転車に乗る姿は、ハンバーガーショップで朝食をとっていたとき、お店の前を通った生徒の姿だった。

○　ある朝、午前７時 40 分すぎ、校長室で教育委員会事務局からの電子メールをチェックし終わると、かすかな音が聞こえてくる。黒板消しクリーナーを使っている音である。しばらくして２階のその教室に行く。

Ｊさんは一人で勉強していた。

校長「毎日、ご苦労様。」

Ｊ「いえいえ。」

校長「周囲の生徒たちは、知ってる？」

Ｊ「はい。」

校長「『教員に気に入られようとしてやってるんだろう。』とか言われない？」

Ｊ「そんな・・・。そんなことありません。」

校長「そう」

Ｊ「最近は、皆、ゴミを出さないように気をつけてくれています。」

校長「そうか・・・。」（『馬鹿なことを尋ねてしまった。』とつくづく思った。）

Ⅳ　最後に

本稿で紹介した会話等は、筆者が校長を務めていた大阪府立普通科高等学校において、保護者向けに２年間にわたって発行した「校長室だより」（Ａ４版で両面印刷、1～46 号）に記載した内容からピックアップしたものである。「校長室だより」は、保護者の方々に校長の方針、教育活動の内容、生徒たちの活動状況などを知っていただき、赴任校の教育活動への協力・支援をいただくために発行していた。

さて、校長が生徒との触れ合う機会は、日々生徒と接触している教員と比べると極めて少ない。したがってメモとして残せたわけであるが、教員が生徒との会話を記録すればもっと大量で豊富な内容のものになったであろう。しかし、本稿の内容だけでも活き活きとした生徒の様子をわかって頂けたと思う。

学校によっては、生徒の特性、教員集団の考え方、保護者からの期待、地域からの要望等によって、生徒指導の方針が異なる。場合によっては同じ高校内でも学年の担任団によって、専門高校の場合は学科によって方針が異なることがある。このことに関しては外部から見るとなかなかわからない。そのことを念頭に、自らの高校時代を思い出しつつ再度読んでいただければ、また違った印象を持たれることと思う。そのうえで、教職課程を履修している学生の皆さんが教職をめざす思いを一層強くしていただければ幸いである。